四国大学紀要，(A) 62：87－106，2024
Bull. Shikoku Univ. (A) 62：87－106，2024

研究ノート

# 新居格年譜補正稿（2）
## ―― 昭和10年代を中心に ――

田 中 敏 生

Explanatory Notes on the Chronological Record of *Nii Itaru*（2）
―― Especially from 1935 through 1944 ――

Toshio Tanaka

Keywords : 華麗島　林語堂　パール・バック　スタインベック　レイモント　与謝野晶子

### はじめに

新居格（にい・いたる：1888～1951）をめぐる研究は，あまり進んでいない。その大きな理由のひとつは，彼があまりにも幅広い活躍をしているため捉えどころに苦しむという点に求められようし，そもそもその事跡の跡付け自体が大きな困難を伴うという点にもあろう。したがって，研究の現段階を乗り越えるためには，彼の年譜的な事項の確定そのことに力を注ぐ必要があるだろう。

そうした考え方から，下記の論考（以下「前稿」と呼ぶ）では，昭和20年代を中心に，彼の年譜的事項について検討を進めた。

・田中敏生（2023）「新居格年譜補正稿 ― 昭和20年代を中心に ― 」『四国大学紀要』60号
: https : //shikoku-u.repo.nii.ac.jp/records/2000014

本稿では，その継続作業として，昭和10年代について同様の検討を進める。すなわち，下記文献Ⅰに附載された年譜（以下〈年譜〉と略記する）やⅡの記述に基づきつつ，その確認・補正を試みる。

Ⅰ和巻耿介『評伝　新居格』（文治堂書店，1991年12月）〔本稿では〈評伝〉と略記する〕

Ⅱ小松隆二「〈小伝〉“地方自治・地方行政の鑑”新居格の生涯と業績 ―― 典型的な自由人・アナキスト」『杉並区長日記　地方自治の先駆者・新居格』（虹霓社，2017年10月）附載〔本稿では〈小伝〉と略記する〕

具体的に行なった行き方を箇条書きふうにまとめると，次のようになる。

①〈評伝〉附載の〈年譜〉に基づきながら，その確認や関連することがらの補いを行なった（確認できなかったものもある）。事実と異なるものについては，それを改めた。〈年譜〉の掲出に際しては，①②③，ABC，などの記号を適宜附した。

②依拠資料としてデジタルコレクション（国立国会図書館）を用いたものについては，参照箇所をコマ数（ページ数ではなく）で示した。URLも，つとめて示すよう心掛けた。一般公開されている資料には「◎」印を，送信サービスで見られるものには「○」印を，それぞれ附した（それ以外の資料は「・」印）。

③当該年に刊行された書物を，「サイニー」の蔵書検索等で補った。

④小松隆二氏の〈小伝〉に記載のあることがらも，要約的に掲げた。これも，補いうるものについては，それを記した。

⑤〔検索状況〕の項を設けて，「ざっさくプラス」でのヒット件数を記した。彼の活動ぶりを，分量面から窺うよすがになろうかと考えたからである（前稿ではサイニーのものも併せ示したが，この時期ではヒットするのが書物のみであるので，省略に従った）。

⑥「ざっさくプラス」は複数のソースからの情報を合わせてあるので，明らかに重複と認められるものについては，これを除いた。

⑦年齢は，旧に仍って数え年を用いた。年の表記は，なるべく昭和を用いたが，西暦によったところもある。

もとよりこれらは甚だ不十分なものに過ぎないが，それでも，研究の現状を乗り越えるということのためには，まったくの無駄に終わることはないであろう。

昭和１０年（１９３５）〔４８歳〕

昭和10年について，〈年譜〉では，次の２点と，書物の刊行１点とを記す。

①一月，三週間台湾に講演旅行，林語堂を訪ねる。

②三月，与謝野鉄幹（寛）の葬儀に出席，弔詞を述べる。受付に長女好子。

A『大地』（パールバック著，第一書房，発行者・長谷川巳之吉）

〔①について〕

①の台湾旅行は，昭和11年１月のことであろう。次の資料が参考となる。

○「華麗島」（『生活の窓ひらく』所収。第一書房，昭和11年８月。239コマ）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1230599/1/239

この文章の末尾の注に，《昭和十一年一月中旬に台湾に旅した。そのときの記録。『名古屋新聞』に掲げたもの。》と記す（242コマ）。

また，「林語堂」は「林献堂」あろう。次の文章に，その庭を散歩したことが述べられている。

○「莱園の逍遥」『文芸』４巻４号（昭和11年４月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10988044/1/105

○再録：『野雀は語る』（青年書房，昭和16年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130297/1/60

話題は主に庭のことであるが（後半は安平），林献堂の紹介のために次の書物を引いている（引用部分は，第一篇・第五章「民族運動」の130コマ）。

◎矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』（岩波書店，昭和４年10月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1191101/1/130

旅中のできごとについては，次の文章に詳しく述べられている。

・「華麗島抒情」『文芸汎論』６巻４号（昭和11年）

また，『台湾文芸』という雑誌にも一文を寄せている（外国語排斥的な風潮を，文学にとって好もしからぬものとして憂える内容）。

・新居格「文学に於ける言葉の問題」『台湾文芸』３巻２号（昭和11年，台湾文芸連盟・編）

ちなみに「華麗島」は，台湾を指す言葉であり，16世紀にポルトガル人航海者が島の姿を見て，「イラー＝フォルモサ」（Iluha　Formosa＝華麗の島）と呼んだのに始まるとされる（下記文献，第一章「地名沿革」の「フォルモサ」の項）。

◎『台湾志・巻一』（伊能嘉矩・編，文学社，1902年）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1918593/1/38

後に新居格は，この旅行をふりかえって《わたしは台湾の旅から帰つて一段とその決心を強めた。》と語っている（下記文章，180コマ）。「決心」とは，世人の拍手を求めず，ただ自分自身の思索を深めることだけのために書くことである。この旅が，短いながらも大きな意味を帯びたことが知られる。

◎「愚かしき独白」『街の哲学』（青年書房，昭和16年１月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130299/1/180

〔②について〕

②については，『冬柏』（鉄幹編集の歌誌）の追悼号が参考となる。

○『冬柏』６巻４号（昭和10年４月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10987180/1/3

与謝野鉄幹（1873～1935）に関連する人々による弔詞・追悼文・挽歌などが集められている。「消息」欄の記事から，26日に死去し，28日に文化学院で葬儀が行われたことが分かる（戒名は「冬柏院雋雅清節大居士」。受付の新居好子については未確認）。弔詞を述べた人として，次の諸氏の名前があがっている。

戸川秋骨　新居格，佐藤春夫，平野万里，西村伊作，西村アヤ，倉林智恵子（文化学院生徒代表），木本米治（丹後峯山の人）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10987180/1/43

新居格の「弔詞」（３月28日）も見え，『都新聞』

（３月27日）の記事を併せ収める。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10987180/1/17

五月になって遺稿歌集が刊行された。

○『与謝野寛遺稿歌集』（与謝野光編，明治書院，昭和10年５月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1213932/1/3

〔A について〕

A○『大地：長篇小説』（パアル・バツク著，新居格訳，第一書房，昭和10年９月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1260340/1/4

冒頭に「序文」を附している。①翻訳の理由として，第一に映画化に際しての南京政府による原作の歪曲に対して正しい姿を伝えたいためと，第二に我が国の農民作家のために農民小説として参考に供したいためと，第三に日本人以外の外国人が中国をどの程度に描きうるかを考えたいためと，以上の三つがあること，②バック女史がこの小説で大きな成功を収めたのは，彼女が実質的に中国人といってもよいくらいの人物であるからであること，などについて述べている（デジタルコレクション所収の「序文」は読みにくい箇所があるので，便宜，他館所蔵の第三版所載のものに依った）。映画化による歪曲については，後にそれが杞憂に終わったむね語っている。

・新居格「「大地」鑑賞 ― 金子洋文君の「大地」― 」『演芸画報』（昭和13年３月号）

第二部『息子達』，第三部『分裂せる家』は，翌・昭和11年に刊行された。それらにも，それぞれ序文が見える（昭和11年の条参照）。

○『息子達：長篇小説』（パアル・バツク著，新居格訳，第一書房，昭和11年６月）

○『分裂せる家：長篇小説』（パアル・バツク著，新居格訳，第一書房，昭和11年12月）

この三部作は，このあとも何度か再刊された（サイニーによる。戦後については前稿・昭和24年の条参照）。

１：パアル・バック代表選集版（第一書房）

a『大地』　：昭和12年10月

b『息子達』　：昭和12年11月

c『分裂せる家』：昭和12年11月

２：同選集改版版（同）

a『大地』　：昭和12年12月

b『息子達』　：昭和13年２月

c『分裂せる家』：昭和13年３月

３：戦時体制版（同）

a『大地』　：昭和13年

b『息子達』　：昭和13年

c『分裂せる家』：昭和13年

４：戦時体制版改版（同）

a『大地』　：なし

b『息子達』　：昭和14年７月

c『分裂せる家』：昭和14年８月

この時期，パール・バックについては，次のような記事が見られる。

１）・新居格訳「〈支那小説〉春・暴動（「大地」第十四章）―〈パアル・バック〉」『セルパン』第56号（昭和10年10月）

２）○新居格「パアル・バツク夫人」『伝記』２巻１号（昭和10年１月）：中国民族は《征服し難い》として，その《測り知られぬ力》を認めている（100コマ）。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1486472/1/98

３）・新居格「『母』の作者」『セルパン』第62号（昭和11年４月）：標題は文章冒頭による。

４）・新居格ほか「「大地」（パアル・バック）座談会」『セルパン』第87号（昭和13年４月）

〔その他の書物〕

この年，次の書物が再刊された。

B○『月夜の喫煙』（不二屋書房，昭和10年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1234827/1/4

初刊は大正15年であった。

◎『月夜の喫煙』（解放群書・1，解放社，大正15年３月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1019148/1/3

また次のパンフレットも刊行されている。

C○『能動精神パンフレツト』（田辺茂一編，紀伊国屋出版部，昭和10年２月）

諸家の文章を集めたものであり，新居格については「芸術派の思想性 ― 文学と思想性 ― 」を収める（39コマ。初出：「文学と思想性一～三」『東京朝日新聞（朝刊）』昭和９年11月14日～16日）。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1171019/1/39

行動主義について，新居格は次のような文章を書いている。

1）○「〈最前線を行くもの〉思想の前衛・行動主義私観」『行動』３巻１号（昭和10年１月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1539194/1/71

2）・「行動主義文学の思想性」『新潮』（昭和10年２月号）

3）○「新文学の基根を追ふ ― 能動的精神の三触面 ― 」『行動』３巻４号（昭和10年４月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1539197/1/106

4）・「「長靴と上靴」の問題 ― 行動主義文学の形成と画線 ― 」『新潮』（昭和10年６月号）

また，これに先立って次の座談会が催されていた。

○「「文学の指導性」座談会」『行動』２巻11号（昭和９年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1539192/1/54

〔事跡補遺１〕（日本ペンクラブ）

この年，日本ペンクラブが創設された。国際連盟脱退（昭和８年３月），文芸懇話会設立（昭和９年１月）など，国内外の困難な状況のもとでの成立・運営の事情については，次の文献に詳しく述べられている。

○『日本ペンクラブ三十年史』（日本ペンクラブ，1967年）：第二部・第一章「戦前の日本ペンクラブ」（野口冨士男氏筆）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1348319/1/38

新居格については次のようなことがわかる。

1）創立のための第一回の打合会（昭和10年６月19日）に出席した（39コマ）。

2）第二回の打合会（７月19日）にも出席した（43コマ）。

3）上の打合会で規約が決まり，それに基づいて評議員に選ばれた（44コマ）。

なお第一回の評議員会が10月７日に開かれ，そこで会長（島崎藤村）副会長（有島生馬・堀口大学）等々の役員が選ばれた（44コマ）。また，発会式（第一回総会）は11月26日であった（45コマ）。

翌昭和11年９月に，アルゼンチン・ブエノスアイレスで国際ペン大会（第14回）が開かれ，島崎藤村と有島生馬とが参加した。このとき，東京大会の開催（第18回，昭和15年）が承認された（実際には，日中戦争のため実現しなかった）。

国際ペン大会について，新居格は次のような文章を書いている。

1）・「〈国際文化情報〉ペン・クラブの活動」『セルパン』第54号（昭和10年８月）

2）・「ペンクラブ私見（１・２・３）」『朝日新聞』（昭和11年９月19日～21日）

3）・「ペン・クラブ東京大会の意義」『日本学芸新聞』13号（昭和11年10月１日）

4）○「解説　国際ペン・クラブ」『文芸』６巻８号（昭和13年８月）：６月15日の評議員会で，①第16回国際大会（於プラハ）に代表を出さないこと，②昭和15年に開催予定の東京大会（第18回）を返上したこと，などが決定されたことを，冒頭で述べている。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10988072/1/66

前稿でも触れたが，２）について高見順は，排外的な世の風潮や，組織内への「官」の介入に対する《微妙な抵抗》を見ている（下記文献56・58コマ）。

○高見順『昭和文学盛衰史・二』（文芸春秋新社，昭和33年11月）：第四章「ペンクラブの今昔」

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1336713/1/56

そうした姿勢は，パール・バックについての２）の論考（前掲）で示された中国民族観にも，大陸進出的な政策へのそれとして，認め得るのではないかと思われる。小松氏のしばしば指摘する時流への抵抗の姿勢もまた，これと通うであろう（昭和16年・A『野雀は語る』の「自由・不自由」，昭和17年・A『心のひゞき』の「春に考へる」，昭和18年・B『心の日曜日』の書名などについての氏の所説参照）。

〔事跡補遺２〕（モラエス七回忌法要）

この年の７月に，モラエス七回忌法要のため徳島に帰っている。政府肝煎りの大がかりな催しであった（下記論考に詳しい）。

・佐藤征弥（2021）「モラエス七回忌法要の背景：顕彰，観光への期待，『日本精神』刊行の意味するもの」『令和２年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報

告書　異文化に照らし出された四国：グローカルな視点からの地域文化に関する文献調査から』（徳島大学）

: https : //repo.lib.tokushima-u.ac.jp/115948

モラエスをめぐる新居格の文章は，下記論考の末尾【参考Ⅰ】参照。

・河田和子（2021）「貴司山治におけるモラエスの影響：日本の文学者におけるモラエス受容」（同上）

: https : //repo.lib.tokushima-u.ac.jp/115950

次の文章もモラエスに言及する。

〇新居格「時事批評」『事業之日本』14巻８号（事業之日本社，昭和10年８月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1540971/1/30

〔〈小伝〉の記述１〕**（日本学芸新聞）**

小松氏の〈小伝〉では，①この年，『日本学芸新聞』が創刊されたこと，②新居格が継続的に筆を執ったこと，③石川三四郎，壺井繁治も稿を寄せたこと，④「政治の科学性」「民族社会主義」といった新造語による議論がなされていること，等の事柄が述べられている（p242）。

この新聞は，川合仁の編集・発行によるものであった。ざっさくプラスによれば，昭和11年１月から昭和18年４月まで，39件の記事が新居格のものとしてヒットする（葉書回答等も含む。ちなみに，小松氏の言及する石川三四郎や壺井繁治は，それぞれ35件および11件）。小松氏の掲げた語は，次の文章に見える。

a「政治の科学性，全政局へ提言する」第28号（昭和12年４月20日）

b「民族社会主義 ―― 国際関係の一主張」第43号（昭和12年10月20日）

a では，当時の林銑十郎内閣の政策に科学性が全く欠けることを論じ，b では《豊かな国・強い国とそうでない国の調和》（〈小伝〉）を考えている（標題は「諸民族間における社会主義」の意）。

なお，和巻氏〈評伝〉によれば，後に『区長日記』が学芸通信社から出されたのも（昭和30年），このときからのつながりに由来するとのことである（p57）。

〔〈小伝〉の記述２〕**（寄稿雑誌）**

〈小伝〉では，昭和10年以降に寄稿した雑誌として，次の13誌が挙がっている（p241）。「ざっさくプラス」や「デジタルコレクション」（館内限定を含む）で記事を確認し得たものについては，その件数を示した（アンケート等も含まれる。また，これ以外のものがないということではない）。「＊」印のものは記事を確認し得なかった雑誌である。

①『改造』　15件（昭和17年まで）
＊②『アラベスク』
＊③『シャリヴァリ』
④『月刊文章』　３件（昭和15年まで）
⑤『新潮』　37件（昭和16年まで）
⑥『蝋人形』　８件（昭和14年まで）
⑦『学芸』　２件（昭和13年のみ）
＊⑧『文芸情報』
⑨『婦人日本』　９件（昭和16～17年）
⑩『生活』　３件（昭和14～15年）
⑪『科学ペン』　２件（昭和16年のみ）
＊⑫『温泉』　（戦後の記事のみ）
⑬『ユーモアクラブ』１件（昭和16年のみ）

※⑬は，〈小伝〉では「グラフ」とあるが，サイニーにより訂正した。

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは，72件がヒットする（重複９件を除く）。

## 昭和１１年（１９３６）〔４９歳〕

昭和11年について，〈年譜〉では，次の２点を記す。

①「読売」紙上で朔太郎に「公開質問状」，
②菊岡久利の詩集「貧時交」に序文。

〔①について〕

この質問状を含めて，『読売新聞』（昭和11年）に次のような一連の記事が掲載されていた（ヨミダス歴史館による）。

a：萩原朔太郎「悪ニヒリズムを排斥する（ヒューマニチイのない文壇）」（上・下）６月９・10日

b：新居格「数ケ条の質問を提起す ― 萩原君の所説にたいして ― 」（上・下）６月13・14日

c：萩原朔太郎「詩人と評論家の立場（新居格氏に答へて）」6月16日

aの論旨は，ロマンチシズムとニヒリズムとはヒューマニティの軸上で対極をなすが，近時日本で標榜されるニヒリズム文学にはヒューマニティが無いため，「無精者の昼寝」のような悪ニヒリズムに堕している，ということであるらしい。

これに対してbでは，（上）で次の四つの疑問点を示し，（下）でその細説を述べている。

1）萩原氏の「モラル」（a・上）の意味内容如何。

2）ニヒリズム・ロマンチシズム・リアリズムの関係如何（ロマンチシズムの対極はリアリズムではないのか）。

3）日本のニヒリズムの発祥は，自然主義（a・下）ではなく，ダダイズムではないのか。

4）ニヒリストはヒューマニストの同義語（a・下）であるのか。

しかしcでは，理論的な探求は評論家の仕事だと述べて，回答を避けている。

〔②について〕

『貧時交』は，昭和11年1月に第一書房から刊行された（サイニーによる）。次の叢書に収められている。序文は横光利一であり，新居格は跋文を寄せている。末尾の「著者ノート」も当時のものである（1936年1月）。

○『（全詩集大成）現代日本詩人全集・第14巻』（東京創元社，1955年）

○序（横光利一）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1356376/1/67

○跋（新居格）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1356376/1/87

○著者ノート（URL同上）

標題作「貧時交」（67コマ）では，杜甫の「貧交行」をエピグラフに引く。念のため原詩を掲げる（中華書局版『杜詩詳注』第一冊p165）。

翻手作雲覆手雨　　紛紛輕薄何須數
君不見管鮑貧時交　此道今人棄如土

第三句が書名の由来であろう。詳注では《傷今思古》と注するが，菊岡氏の詩は，《この密接な信頼を／わたしたちは互ひに決して忘れたことがない》（67コマ。「／」は改行）と仲間との絆の強さを歌い，彼らの死を思い，新たな仲間の到来を予感している。《貧賤之知不可忘》の語もよく知られているであろう（後漢書・巻26「宗弘伝」。中華書局版・第四冊p905）。

上の詩人全集には，自伝も収める。《豚箱生活三十回》という言葉も見える。

○「自伝「貧時交」まで」

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1356376/1/66

彼の父は，晩年鎌倉に住んで俳句を詠んでいた。その父が亡くなったとき（昭和25年），新居格を含む多くの人達が手紙を書き送ったことが，次の文章に記されている。

○菊岡久利「新吉の句その他」『詩学』5巻8号（岩谷書店，昭和25年8月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/6065059/1/43

菊岡氏の小伝は，次の書物に見える。アナキズムとの関連も記されている。

○『日本詩人全集・第7巻（創元文庫）』（創元社，昭和27年12月。巻末解説：小野十三郎）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1356284/1/151

〔書物の刊行について〕

この年，次の4つの書物が刊行されている。

A○『生活の窓ひらく』（第一書房，昭和11年8月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1230599

これまでに書いた文章を，季節に従って配列しながらまとめたものである。三月に始まり二月に終わる。各篇末尾に初出等についての自注を施す。巻末に「あとがき」を添えて，内容の高下はともかく，自分なりの姿がありのままに出ているので，そのようなものでも読んでみたいと思う人に捧げると記す。

B○『情熱の妖花クレオパトラ（新伝記叢書第4）』（新潮社，昭和11年6月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1220641/1/3

冒頭に「序文」を載せる。①評伝よりも柔らかく，物語ふうに書いたこと，②彼女は超豪華版的存在であり，事実そのものが物語的たらざるを得ず一大戯曲であること，などを述べている。

C○『息子達：長篇小説』（パアル・バツク著，新居格訳，第一書房，昭和11年６月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1149702/1/3

冒頭に「序文」を載せる。キャンフィールド（米女性作家）の評言（中国人の生活の意味に対するバック女史の見方が翻って自分たちのそれを一層はっきりさせる，との趣意）を紹介したうえで，①『大地』映画化に際しての南京政府の過度な干渉の弊を救うために翻訳の挙に出たこと，②バック女史は英語で作品を書く特殊な中国人だと見うること，③これまでの総ての作品が中国に材を取る点で特異なこと，④バック女史の人間と芸術をめぐる綜観的な論稿が望まれること，⑤文学の問題に留まらず，より広く中国の実相と心理とを知るという関心で読んで欲しいこと，等々のことがらが述べられている。

D○『分裂せる家：長篇小説』（パアル・バツク著，新居格訳，第一書房，昭和11年12月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1227476/1/3

冒頭の「序文」には，①映画『大地』における歪曲の欠陥を補うために翻訳を試み，それが好評を得たこと，②中国理解のためにこの翻訳が役立てば嬉しいこと，③『大地』三部作の訳了に感激を覚えること，などが述べられている。

C の序文では，次の文章を自己引照している（６コマ）。

○「現代支那の題材性」『文芸』４巻６号（改造社，昭和11年６月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10988046/1/116

この中で新居は，横光利一の『上海』（初刊・昭和７年，決定版・昭和10年：サイニーによる）を「租界地小説」と呼んで中国の本当の姿を伝えるものではないとし（117コマ），谷崎潤一郎の下の文章を引きながら，「日本人よ，何故に支那を描かぬか」（読売新聞・初出第３回の小見出し）を，「一つのよき警告」と受け止めている（118コマ）。

○「飜訳小説二つ三つ」『谷崎潤一郎全集・22巻』（中央公論社，昭和43年）〔初出『読売新聞』昭和11年１月29・30・31日。初出では小見出しが附されている。ヨミダス歴史館による〕

谷崎はこの文章を，《（大地の続篇も）引きつづいて新居さんに訳して頂きたいのである。》と結んでいる（全集 p332。原文正漢字）。

谷崎潤一郎（1886～1965）は新居格より二歳年長であった。明治43年，新居格が法科大学一年生の頃，谷崎は『新思潮』に「刺青」を書いた。昭和２年，新居格は，数少ないアナキズム陣営の論客としてコミュニストたちに対峙していた。「谷崎潤一郎氏の芸術」が書かれたのもこの頃である（『新潮』同年６月号）。そこでは《しかし今になって知る，彼は僕の好みとする作家であつてはならないことを。》とも言う（p７）。しかし『大地』をめぐっては，こうした協和的なありようも見られたわけである。

〔事跡補遺〕

この年，新居格は次の文章を発表している（標題は文章冒頭による）。

○新居格「文芸論壇の波動を見る ― 正宗，小林 - 小林，中野の論点 ― 」『文芸』４巻５号（改造社，昭和11年５月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10988045/1/85

次の三つの点を述べている。

a：トルストイの家出をめぐる正宗白鳥と小林秀雄との論争が，思想と実生活の問題になったこと（後に「思想と実生活論争」と呼ばれる）。

b：中野重治と小林秀雄との論争が，論理主義（ないし合理主義）と非論理主義（ないし非合理主義）との対立となったこと（後に「中野重治・小林秀雄論争」と呼ばれる）。

c：中島健蔵の「新しき「無」に就いて」（『新潮』昭和11年４月号）が，b の対立を超える「新しい無」を主張していること。行文については，《この種の感覚基調の論文は明瞭にしてくれる代りに不明瞭を塗抹する》と，その明晰さの欠如を警告している。戦後になってから，中島は次の文章で釈明を述べている。

・中島健蔵「回想の文学・５：心ひそかに」『心』28巻３号（昭和50年）

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは79件がヒットする（重複４件を除いた）。

昭和１２年（１９３７）〔５０歳〕

昭和12年について，〈年譜〉では，次の１点と，書物の刊行２点とを記す。

①京都，大坂，神戸を経て徳島へ帰省。

A『真相ソ連』（オルガ・ディミトリヴナ著，豊文書院）

B『我国土我国民』（林語堂著，序・パールバック，豊文書院，発行者・風間是宏）

〔①について〕

①については，事実確認をなしえていない。

〔A について〕

A○『真相ソ連』（オルガ・デイミトリーヴナ著，豊文書院，昭和12年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1260752/1/6

全体は「第一篇　牢獄生活の体験」「第二篇　ソ聯に関する考察」の二篇からなる。冒頭に「訳者序」を添える。①著者は亡命中の婦人であり「オルガ・デイミトリーヴナ」は筆名であること，②ソヴィエト政治の客観的な記述に努めていること，③ドイツ語訳からの翻訳であること，等々について述べている。

〔B について〕

B『我国土・我国民』が刊行されたのは，昭和13年である（当該年参照）。

なお，次の本（歌集）に，藤森成吉氏らとともに序文を寄せている。

・杉浦翠子『浅間の表情』（藤浪会，昭和12年３月）

どちらの序文も，次の歌を引く（句点原文）。

貧しきは遂に貧しく富みたるはいよいよ富みたり。明治このかた

〔事跡補遺〕

この年の『短歌研究』６巻６号（改造社，昭和12年６月）は，「私の歌袋から」と題して，諸家の短歌を紹介している（尾崎行雄，加藤武雄，三好達治など）。新居格の歌は17首が見える（番号は私に附す）。彼の歌詠みとしての側面を窺うに足る資料と言えよう。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10987034/1/97

道

①道といふ道はローマに通ずればドン・キホーテよでたらめに行け

②この入江ペパアミントの色なれば鷗も白し春雨もよし

③落椿黒き土にも艶（えん）なりと恋ざめの日の旅に知るわれ

④白（しら）梅は或る日にさびしそのいろに似るたそがれとわれのこゝろと

中禅寺湖畔にて三首

⑤白根山うすむらさきの色なればわれの葉巻のけむりをば見る

⑥白根山白きは夢のバンガラウ下野花（しもつけばな）はカアテンの色

⑦チエホフの「桜の園」を不図思ふ閉ざす別荘白樺と山毛欅

宮島にて

⑧春なれや気軽に覚めし宮島はスワンもなせり朝の挨拶

鹿児島にて，註　おごじよとは同地にて娘の意

⑨南国の春三月の太陽（ひ）のひかりおごじよのありて木蓮に似る

南支那海にて

⑩幻に温度のありとわれ知れり南の支那の六月の海

⑪たそがれに陰影（かげ）を交へて暮れてゆくわがこゝろにも似たり冬の日

⑫新調の道化役者の服を着て枯野にひとり鼓打つわれ

⑬わが胸の沼を泳げる白鳥は銀座に行けばタバコをも吸ふ

⑭浴室のガラスにも似て曇りたる車窓（まど）に描けり裸婦のまぼろし

⑮現（うつ）には白紙（はくし）の如きさびしさも夢には赤きひなげしの花

⑯わが瞳真昼の花の明るさを見つゝこゝろに夕暮を知る

⑰山上の朝の空気に吸ふタバコ気の咎むれどのめば甘（うま）かり

これに先立って，彼は二つの雑誌に歌稿を投じて

いた。

a：○『相聞』１巻４号（太白社，昭和４年９月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1545498/1/17

b：○『スバル』２巻５号（太白社，昭和５年５月。出版社は奥付による。この雑誌は『相聞』の後継誌であり，巻号も継承している）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1511290/1/12

aは「葉巻」の題で五首を収め（上の⑤⑦⑥⑰と下の⑱），bも「南国の春」と題して五首を載せる（上の⑭⑧⑨と下の⑲⑳）

⑱恋に行く平安の道広ければ銀鞍白馬葉巻を吸はん

⑲青島のビラウの蔭にわれ立ちてポウ(ママ)の「フウラ」を思ひけるかな

⑳筑紫野に降る春雨はヂヤスミンの匂のありと君に告げまし

次の書物の「附録　九州ところどころ・芸備三日」には，十五日におよぶ講演旅行中に詠んだ歌が引かれ（下の㉑および上の③⑨），あるいは歌の背景とおぼしき記事が見える（⑭⑧）。

◎『近代思潮講演集』（加藤武雄・高田義一郎・新居格・西村真琴，大阪毎日新聞社・東京日日新聞社，昭和５年４月）

〔歴史と風光の町唐津〕

㉑松浦潟ペパアミントの色あらず，シャンペンに似て寄する白浪

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1027888/1/54

〔肥後の熊本〕③を載せる（旧詠想起。未句「旅に思へり」）。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1027888/1/56

〔九州での触目触観（鹿児島）〕⑨を載せる（前後句二行書き。第三句「日のひかり」）。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1027888/1/61

〔（小倉から大牟田への車中）〕⑭の背景記事。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1027888/1/52

〔広島と宮島〕⑧の背景記事。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1027888/1/64

次の文章には，自作の和歌十一首についての解説が見える。

○「短歌漫談」『短歌研究』４巻11号（改造社，昭和10年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10987015/1/44

独自歌は下の三首である（他の八首は出現順に，⑪①⑱⑫⑤⑮②③）。

㉒夕ぐれの落葉を踏みてゆくわれは悲しき陰影（かげ）の動くにも似る（45コマ）

㉓徒に時間（とき）を過すも惜しからず女性（をんな）よ汝（なれ）は天地の不思議（同）

㉔パパイアを小皿に入れて差出しつ官能的よとほゝ笑む女（46コマ）

中禅寺湖畔の三首（⑤⑥⑦）については，次の文章が参考となろう（32コマ，84コマ）。

○「住宅の特異的観点」『季節の登場者』（人文会出版部，昭和２年２月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1179122/1/32

○「中禅寺湖畔の幻影」（同上）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1179122/1/84

なお，先の講演旅行の際，次の即吟のあったことが西村真琴の記事でわかる。

㉕この男かたちは牛に似たれども心はやさし雛げしの花

◎西村真琴「日向みかん　別府にて」『近代思潮講演集』（前掲）所収

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1027888/1/62

新居自身は，別の即吟を下の文章で披露している。

㉖ビラウ樹の蔭に裸形（らぎやう）のわれありて
　　君をニンフと幻に見る

○「ビラウ樹下の幻想」『街の抛物線』（尖端社，昭和６年３月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1178523/1/174

また，和巻氏〈評伝〉は，次の２首の紹介で全篇を結んでいる（p114）。

㉗仇めける君の姿は薄月の夜の花にも似たりと云わむ(ママ)

㉘玉千代の言葉に花の匂あり眉山に似たる君の眉かな

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは，74件がヒットする（重複９件を除いた）。

昭和１３年（１９３８）〔５１歳〕

昭和13年について，〈年譜〉では，次の１点について述べる。

①十年代は映画への執筆も盛んになる〔以下，列挙された論題に改行を施し，abc 等を私に附して示す。表記を改めたものもある。掲載誌の分かったものは，それも書き添えた。＊は掲載誌未詳のもの〕。

○a「支那映画話」『キネマ週報』206号（下記⑪参照）

・b「映画批評に就て」『キネマ旬報』498号（昭和９年３月）

○c「映画随筆」『キネマ週報』185号（下記⑩参照）

○d「場末の映画館にて」『キネマ週報』227号（下記⑫参照）。

・e「映画に動く時代性」『セルパン』48号（昭和10年２月）

・f「試写室で会う（逢ふ）人々」『セルパン』52号（昭和10年６月）

＊g「映画と文学者」（一）～（三）

○h「『罪と罰』を見る」『キネマ週報』278号（下記④参照）

○i「特選映画批評『我等の仲間』」『キネマ週報』290号（下記⑨参照）

・j「ニュウス映画の効用性」『日本映画』（昭和12年11月）

＊k「日本映画の当為」

○l「『モダン・タイムス』を観る」『スタア』６巻４号（昭和13年２月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1753872/1/10

＊m「映画俳優如是我観」

＊n「――風とともに去りぬ――近年最高の収穫」

・o「映画の感性派」『映画之友』（昭和13年11月）

＊p「『映画奨励法』私見」

＊q「映画人の印象――川喜多長政」

＊r「映画法の意図」

〔①について〕

発表誌の分かったものの中では『キネマ週報』が目立つ。特に昭和11年から12年にかけては，「特選映画批評」の総題のもとに，個別の作品評を少なからず書いている（①～⑨。作品名のみを示す）。上の acd は，いずれも随想ふうの文章である（⑩⑪⑫）。

①「男性対女性」（274号：昭和11年９月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965179/1/11

②「丘の一本松」（275号：昭和11年９月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965180/1/7

③「科学者の道」（277号：昭和11年10月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965182/1/6

④「罪と罰」（278号：昭和11年10月）〔上の h〕

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965183/1/7

⑤「祇園の姉妹」と「荒木又右衛門」（279号：昭和11年10月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965184/1/7

⑥「将軍暁に死す」（280号：昭和11年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965185/1/6

⑦「ゴルゴタの丘」（281号：昭和11年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965186/1/9

⑧「新しき土」（285号：昭和12年２月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965190/1/8

⑨「我等の仲間」（290号：昭和12年５月）〔上の i〕

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965195/1/7

⑩「映画随筆」（185号：昭和９年１月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965107/1/11

⑪「支那・映画ばなし」（206号：昭和９年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965122/1/14

⑫「場末の映画館にて」（227号：昭和10年２月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965137/1/14

新居格が『世界文学』という雑誌を主宰していたことも，この雑誌によってわかる。188号（昭和９年２月）の「朱インキ」欄（巻末の雑録欄）に，《今度本社の別体として世界文学社といふのを起し，雑誌「世界文学」を発売することになつた。》と記し，その広告も載せている。そこには「新居格・編輯」「創刊三月号」とあって，新居格の「デコブラと日本文学」も目次に見える。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965109/1/16

また，191号（昭和９年３月）には，「待望の四月号」の広告があり，新居格執筆の記事は「世界文学と日本文学」である（そのあとは広告が見えず，第２号までででこの雑誌は終わったのではないかと思われる）。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7965111/1/9

他方，『キネマ旬報』のほうには，上のｂのほかに次の文章を書いている。

・「「女の心」そのほか」（530号，昭和10年２月）

・「映画愛好の弁」（611号，昭和12年５月）

なお，前稿でも触れたが，戦後になって彼が「日本映画教育協会」の会長職に就いていたことも，次の記事（中身は新居格追悼）から分かる。

○「編集余録」『視聴覚教育』６巻１号（日本映画教育協会，昭和27年１月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/6067968/1/37

〔書物の刊行について〕

この年，林語堂の翻訳書が刊行されている。

A○『我国土・我国民』（林語堂著，新居格訳，豊文書院，昭和13年年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1901391/1/3

冒頭に「訳者のことば」を載せる。①翻訳の理由は，本書が中国人および中国文化を，冷静かつ懐に立ち入った形で述べたものであり，かつまたそれが，日本人にとって大いに必要と考えたからであること，②翻訳に際しては，種々のことがらについての調査討究が必要であり，そのために極めて多くの人たちの助力を仰いだこと，などが述べられている。パール・バックの序文も添えられている。

次の書物の「附録　参考書挙要」の章に，新居格の訳書が挙がっている。訳文に問題のあることも指摘されている（158コマ）。改訂版を促した一つの要因であろう。

○長沢規矩也『支那学術文芸史』（三省堂，昭和13年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1255388/1/158

○B『改訂　我国土・我国民』（豊文書院，昭和13年12月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1263212/1/3

冒頭に「改訂版序文」が附加されている。①初版三千部が月余にして売り切れたため改訂に踏み切ったこと，②その際，長沢規矩也氏の厳密精緻な示教が大いに役立ったこと，③小野忍氏や山本氏からも有益な教示のあったこと，④林語堂の考えに盲従する必要はないが，批判を行なうためにも的確な理解が大切であること，等々のことがらが述べられている。末尾に中国語の発音（アルファベット表記）による索引も加わっている（林語堂については，昭和15年にも文章を書いている）。

この書物は，昭和16年に，慶文堂書店という所から「改訂六版」が出ている。サイニーの蔵書検索では，豊文書院の本は昭和15年までしか見えない。あるいは版権が移ったのかも知れない。

なお，次の書物に「岡倉天心と内村鑑三」という一文を載せている（標題は文章冒頭による）。かつて内村鑑三の文章を愛読した事情が知られる。

○『明治の文学』（月刊文章編輯部編，厚生閣，昭和13年12月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1231983/1/76

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは82件がヒットする（重複15件を除く）。

## 昭和１４年（１９３９）〔５２歳〕

昭和14年について，〈年譜〉では，次の１点と，書物の刊行３点とを記す。

①パールバック『大地』の翻訳に関して著作権侵害で訴えられる。弁護士山崎今朝弥と共に対応する。

A『農民』第一部「秋の巻」（レイモント・ラデラス・スタニスラウ著，第一書房，発行者・長谷川巳之吉）

B『怒りの葡萄』（上・下）（スタインベック著，第一書房，発行者・長谷川巳之吉）

C『イヤリング』（マジョリ・ロオリング著，四元社）

〔①について〕

この件については，和巻氏〈評伝〉に詳しい（p 94以下）。

〔A について〕

A○『農民：第一部・秋の巻』（レイモント著，新居格訳，第一書房，昭和14年４月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1260987/1/5

第一部の「序文」には，①昭和13年の夏に青森の黎明草舎を訪ねたこと，②農村調査に来ていた島木健作に出会ったこと，③自分は，ささやかなものを基盤にものを考えたくて来たこと，④そこから農民文学が大切だと考えたこと，⑤手始めにレイモントの『農民』を読んだこと，⑥彼が大作家であることに気付き，翻訳を思い立ったこと，⑦彼の閲歴が作品の随処に反映されていること，⑧彼について既にさまざまな批評があること（その紹介），⑨ポーランドの農村がよく描けていること，⑩人物の描き方も優れていること，等々のことがらが述べられている。

第２部から第４部までは，次のように刊行されている（第４部の序文については昭和16年参照）。

○第二部・冬の巻（阿部知二訳，昭和14年８月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1261001/1/3

○第三部・春の巻（伊藤　整訳，昭和15年１月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1261013/1/3

○第四部・夏の巻（新居　格訳，昭和16年３月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1261026/1/4

また，第一部・秋の前半が，昭和20年に再刊された。

◎『農民』（第一部）（文学社，昭和20年７月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1137099

〔B について〕

新居格訳のこの作品は，次のような順序で出版されたものであろう。

a『怒りの葡萄（上巻）』（四元社，昭和14年11月）
b『怒りの葡萄：上巻』（第一書房，昭和15年６月）
c『怒りの葡萄：下巻』（第一書房，昭和15年９月）

a は，デジタルコレクションにはなく，サイニーでも所蔵館を見ないが，次の目録によってその存在を確かめることができる。

○「新刊図書目録」【昭和14年９月　至11月分】『図書館雑誌』（第33年索引号，日本図書館協会，昭和15年１月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/11230270/1/9

b はデジタルコレクションに収められている。
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1689252/1/5

c はデジタルコレクションには見えないが，サイニーの検索で確かめることができる（第一書房，昭和15年９月）。

上巻の「序文」（デジタルコレクション所収版で６コマ）には多くの事柄が語られている。①この作品から大きな感動を受けたため翻訳したこと，②農民小説である点も翻訳の理由であること，③強風による砂塵と大規模資本の論理によって，大勢の農民達がカリフォルニア州をめざしたこと，④彼等はオーキースと呼ばれて地元の人から蔑まれたこと（オクラホマ州出身者が多かった），⑤オーキースの悲惨を扱ったことが読者に強烈な感動を与えること，⑥ゴーリキー『夜の宿』（戯曲，小山内薫訳がある）の大規模版と見うること，⑦作者の生活体験（カリフォルニア州出身であること，様々な職業を転々としたこと等）と作品との関係に興味をそそられること（レイモント『農民』についてもそうであること），⑧田舎言葉を読むのに苦労したこと，⑨内容面ではジオード家の母親に感銘を受けること，その他の人物（祖父やジョーン叔父，またケイシー元牧師など）もそれぞれに魅力的であること，⑩技巧や文章表現の面でも汲むべきものがあること，⑪ワシントンやニューヨークその他の都会を通して知るのとは全く違ったアメリカが描かれていること，⑫文学を離れてアメリカ理解という点から見ても大いに有用であること，等々のことがらが述べられている。

冒頭には「リパブリック賛歌」の楽譜も載せられている（「オタマジャクシは蛙の子」のメロディー。リズムに小異がある。混声四部だが和声は至って単純で，主三和音の基本形が大半を占める）。

この翻訳については，下記の論考で詳しく論ぜられており，出版当時の多くの書評類も紹介されている。

・山内圭（2022）「ジョン・スタインベックの The Grapes of Wrath の翻訳者としての新居格」『新見公立大学紀要』43巻

次の小さな書物（全16頁）にも言及が見える（ロー

リングスの『イアリング』やレイモントの『農民』なども取り上げられている）。

○板垣直子『農民文学の新研究』（日本文章学会，昭和15年６月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1097681/1/3

なお新居自身は，次の書評文も書いている。

・「洋書評論：スタインベック「怒りの葡萄」」『改造』22巻３号（昭和15年，臨時増刊号）

また，「文学者として観た米国」（昭和15年の条参照）でも，この作品に言及している（「四，最近のベストセラア」「五，文学と映画」の項。20～21コマ）。

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1909919/1/20

〔C について〕

C○『イアリング』（M.K．ロオリングス著，新居格訳，四元社，昭和14年９月。標題の片仮名表記は「ヤ」ではなく「ア」を用いている。原題の“yearling”は「満１年以上２歳未満の家畜」の意。奥付には「一年仔」とも記す）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1149736/1/4

冒頭に「序文」を附す。小説に描かれた，バックスター一家のフロリダの奥地での艱難に満ちた生活には，作者の体験の裏打ちがあり，それが小説以上の感銘を与えると述べている。

刊行後の書評類として，次のようなものが管見に入った。

○森田たま「イアリング」『動物文学』59号（白日荘，昭和14年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1591848/1/40

○書評「イアリング」『文芸』７巻11号（改造社，昭和14年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10988087/1/125

この本は，翌・昭和15年に改版が出る（洛陽書院。当該年参照）。

〔その他の書物について〕

この年，次のような書物が刊行されている（サイニーによる）。

D『支那在留日本人小学生綴方現地報告』（新居格編，第一書房，昭和14年10月）

中国にいる日本人小学生の作文を，尋常六年生までと高等科との七類に分かって集めたものであり，同じ構成で「満州篇」を附録とする。

「序文」には，①大人による現地報告とは違った，子供たちの体験記録であること，②現地小学校の先生方や松本力氏の支援協力に負うものであること，などが述べられている。

また，次の書物に，新居格の「日本文学と農民文学」を載せる。丸山義二の作品「母」も見える（彼は後に新居格の追悼文を書く。前稿・昭和26年の条参照）。この懇話会はこの年にできたらしく，巻末に発会にまつわるさまざまな記事を載せている。新居格が「相談役」であったことも「会員名簿」からわかる。

○『土の文学作品年鑑　昭和14年版』（農民文学懇話会編，教材社，昭和14年２月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1256455/1/216

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは，60件がヒットする（重複６件を除く）。

## 昭和１５年（１９４０）〔５３歳〕

昭和15年について，〈年譜〉では，次の二つの書物の刊行を記す。

A『街の哲学』（青年書房，発行者・島山鉱造，装幀・向井潤吉）

B『文学者として観た米国』（東洋経済出版部，「経済倶楽部講演集」に所収，発行者・神原周平，非売品）

〔A について〕

A の『街の哲学』が刊行されたのは，昭和16年である（当該年・E 参照）。

〔B について〕

B○『経済倶楽部講演　昭和十五年第九輯』（東洋経済出版部，昭和15年４月）

次の三つの講演を収める。

１）安藤広太郎「米の増産に就て」

２）新居　　格「文学者として観た米国」

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1909919/1/16

３）木村　義雄「街の人の見たる米人の対日感情」

各篇末尾に，講演の日時と場所とが記してある。他の二氏が一度だけであるのに対して，新居格のは10回に及ぶ（昭和15年２月21日九州経済倶楽部晩餐会〔以下「経済倶楽部」を略す。〔　　〕の注記無きものは晩餐会〕，22日佐世保，23日長崎，24日熊本，26日広島，27日岡山，28日関西〔午餐会〕，28日神戸〔茶会〕，29日京都，３月８日経済倶楽部〔午餐会〕）。なお，書物末尾の略歴欄には《明治二十一年三月九日徳島県撫養町に生る。》と生年月日も記されている。

〔その他の本について〕

この年，次の書物が刊行されている。

C○『イアリング：決定版』（マジョリー・ローリングス著，新居格訳，洛陽書院，昭和15年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1904569/1/3

前年に四元社から刊行されたものの改版版である。冒頭の「改版に際して」では，①著者が『怪鴉（よたか）』を上梓したこと，②アメリカのツルゲーネフという気がしたこと，③モーロアの『怒りの葡萄』評（米人は都会に疲れて原野に刺戟を求めたのではないかとの意）が，ローリングスにも当てはまりそうなこと，④この人の作は健康であり万人にとって慰めとなりそうなこと，等々のことがらを述べている。

モーロアの評というのは，次の文章を指すと思われる（都会に疲れて刺戟を求めるという評言は36コマ。編輯後記には「ヌーヴェル・リテレール」誌から採ったとある。124コマ）。

○アンドレ・モーロワ「アメリカ」『文芸』７巻12号（改造社，昭和14年12月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10988088/1/36

D○『ありのまゝの貴女』（ノーベル賞文学叢書・第5, パアル・バック作，新居格訳，今日の問題社，昭和15年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1078572/1/2

冒頭に「序文」を附す。①これまでの中国の生活に材を取ったものに対して，アメリカの生活を描いたものであること，②前者が事件中心であるのに対して，これは心理中心であること，③５人の女性を通して女性の生き方について考えていること，④作者バックの分身が随処に見られること，などを述べている。

E○『青春の記録』（クリストファー・モーリ著，新居格訳，洛陽書院，昭和15年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1149727

冒頭の「はじめに」では，①原題は“Kitty Foyle”であること，②1920～30年代を生きた若い娘の告白物語であること，③著者（Morley, Christopher）は詞藻の豊かな作家であること，④主人公はアメリカ女性の典型であること，⑤この作家を紹介できて嬉しいこと，などが述べられている。

〔北京好日について〕

この年，林語堂の『北京好日』（第１部～第３部）が訳されており，そのそれぞれの巻末に文章を寄せている。「１」では魯迅との比較も見える。

１：『北京好日：第一部・道家の娘たち』（林語堂著，小田嶽夫・庄野満雄　共訳，四季書房，昭和15年３月）

○新居格「林語堂 ―人及び思想」

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1687684/1/224

２：『北京好日：第二部・庭の悲劇』（林語堂著，小田嶽夫監修，中村雅男訳，四季書房，昭和15年９月）

○新居格「林語堂 ― その中庸性に就て」

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1687685/1/157

３：『北京好日：第三部・秋の歌』（林語堂著，小田嶽夫監修，松本正雄訳，四季書房，昭和15年９月）

○新居格「林語堂と支那の良識」

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1687683/1/155

この時期における林語堂の邦訳については，それへの批判や反批判をも含めて，下記の文献に詳しい。

・河村昌子（2007）「戦時下日本における林語堂の邦訳」『千葉商大紀要』45巻３号

: https : //cuc.repo.nii.ac.jp/records/2209

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは51件がヒットする（重複６件を除く）。

昭和１６年（１９４１）〔５４歳〕

昭和16年について，〈年譜〉では，次の１点と，書物の刊行４点とを記す。

①十二月六日，母キヨ没。

A『野雀は語る』（青年書房，発行者・島山鉱造，装幀・野間仁根）

B『戦争と文化』（育成社弘道閣，「新世代叢書」16, 発行者・服部育雄）

C『農民』第四部「夏の巻」（レイモント・ラデラス・スタニスラウ著，第一書房，発行者・長谷川巳之吉），二部・阿部知二，三部・伊藤整訳

D『イヤリング』（マジョリ・ロオリング著，洛陽書院版，装幀・中山次郎）

〔①について〕

①については，事実確認をなし得ていない。

〔A について〕

A○『野雀は語る』（青年書房，昭和16年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130297/1/3

冒頭に「序文」を載せる。「野雀粮なし，天地ひろし」の語を引いて，野鳥が囀るように，野の人としての自分の思いをただ語っただけだと述べている（この語は，石山福治編『最近支那語大辞典』から拾ったと記す：94コマ。書名は恐らく「最新」であろう。次の辞典に所引の語句の説明が見える：799コマ・右頁２段目）。

○『最新支那語大辞典』（石山福治編，第一書房，昭和10年）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1689763/1/799

小松氏〈小伝〉では，「自由・不自由」という文章（初出『科学ペン』６巻４号，昭和16年４月）に注目し，《戦時下の自由の抑制・抑圧に不満・皮肉を展開する内容》を見ている（p242）。

末尾の「燕雀の志」の章には，《燕雀は転向や便乗では鴻鵠にはなれぬ。》という言葉も見える（145コマ）。かつて大正末期，アナキストの故をもって「プロレタリア文芸連盟」を除名されたとき（大正15年11月。これによってコミュニストが主流となった），彼は《何が当代の勢力だらうが，何がまた当代の注目だらうが，そんなことで塗かへのきくペンキ主義ではないのである。》と記していた（下記文献，38コマ）。そのときの気概は，ここでも貫かれていると言えよう。

○「病後の散歩」『季節の登場者』（人文会出版部，昭和２年２月）所収

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1179122/1/38

新居格を含むアナキスト除名については，下記の文献に記されている（129コマ）。

○蔵原惟人「プロレタリア文学運動」『現代文学・第１（文学の理論と歴史）』（中野重治・椎名麟三編　新評論社　昭和29年）所収

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1344771/1/129

〔B について〕

B・『戦争と文化』（新世代叢書16, 育生社弘道閣，昭和16年９月）

冒頭に「序文」を添える。①本書が戦時下における文化展望であること，②日本独自の文化が開花することへ向けて努力すべきであること，③戦時下であってこそ，その状況を通じて文化を一層強靱化しなければならないこと，などの事柄が述べられている。デジタルコレクションには見えないので，目次も掲げておく。

〔目次〕

戦争と文化
　欧州大戦と思想
　戦争と文学者
　戦争と娯楽
　言論統制と技術
新体制の国民生活
　国策と国民生活
　隣組の理想
　合理的な社会への憧憬
　職業の新体制
　新しいモラルの問題
　旅行観念の樹立
アメリカ文学雑俎
　アメリカ文学の将来性
　最近のアメリカ文壇
　アメリカの評論家
　アメリカの読書界出版界

文学する日本
日本文化の独創性
向後の日本文学
日本文学と農民文学
生活と文化
生活文化に就て
新生活と美の概念
〔C について〕
C○『農民：第四部・夏の巻』（レイモント著，新居格訳，第一書房，昭和16年３月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1261026/1/4
この作品は，第一部が昭和14年４月に出ていた（当該年参照）。第二部・第三部も他氏によって訳出され，この第四部で完結を見ることになる。
第四部にも「序」を添えている。①国家の存亡にかかわらず，ポーランド人の存するかぎりポーランド文学は亡びないこと（ドイツのポーランド侵攻は昭和14年９月），②ポーランド人の感情や生活を知るためにこそこの作品を読むべきであること，③女主人公ヤグナの運命が哀感をそそること，④彼女をとりまく人たちもそれぞれに深い意味を帯びること，⑤農村小説という以上に人生的深度から感銘を受けること，等々について述べている。
〔D について〕
洛陽書院版『イアリング』の刊行は，昭和15年である（当該年参照）。
〔その他の書物について〕
この年，次の書物が刊行されている。
E◎『街の哲学』（青年書房，昭和16年１月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130299/1/2
冒頭の「自序」には，①自分は市井の散人であること，②そのような人間の触目触感の文章を収めたこと，③中身は平凡であるがそれにも意味はあるであろうこと，④雑誌掲載時に愛読してくれる人のいたこと，⑤平凡であっても自分の賦性に忠実に書いたこと，等々のことがらが述べられている（デジタルコレクションでは「自序」が欠けているので，他館所蔵の本文を参照した）。
次の一文には，著者の立場が簡明に記されている。
◎「凡人私語」
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130299/1/159
〔検索状況〕
ざっさくプラスでは37件がヒットする（重複１件を除く）。

**昭和１７年（１９４２）〔５５歳〕**

昭和17年について，〈年譜〉では，次の二つの書物の刊行を記す。
A『心のひびき』（道統社，発行者・岩壁保）
B『新しき倫理』（金鈴社，発行者・松本玉之助）
〔A について〕
A◎『心のひゞき』（道統社，昭和17年11月）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130291
冒頭の「自序」には，①自分は市井の平人であること，②そのような人間の生活記録であり，感懐であること，などが述べられている。
小松氏〈小伝〉では，冒頭の「春に考へる」から《美しい花を見ても，それを美しくないと思ふほど心を硬化させては不可いのではないか。》（10コマ）といった一節引いて，《戦争や時流に完全に同化するのではなく，辛抱強く心の中でささやかに抵抗する気持》を見ている（p243）。
戸川秋骨（1870～1939）をめぐる追憶の文章も見える。
○「秋骨先生」（120コマ）
○「戸川さん追慕」（122コマ）
: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130291/1/120
秋骨は，昭和４年の初度中国旅行のときの同行者であった（下記論考参照。URL は本学図書館 HP。改修のため，前稿で示したのとは異なる）。
・田中敏生「新居格の初度中国旅行・旅程拾遺 ― 読売新聞および戸川秋骨の記事を用いて ―」『言語文化』８号（2010年）
https : //lib.shikoku-u.ac.jp/contents/organ_repository/community/journal_articles/language_culture.html
魯迅（1881～1936）の訃報に接したときの文章も収められている。魯迅とは，昭和９年の二度目の中国旅行のときに会っている。
○「魯迅の印象」（128コマ）
○「魯迅といふ男」（131コマ）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130291/1/128

〔B について〕

B○『新しき倫理』（金鈴社，昭和17年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1062257/1/1

冒頭の「自序」には，①自分なりの角度から，女性の諸問題，特にその新しい倫理について書いたこと，②説教ではなく，友達の立場から寛いだ調子で書いたこと，③しかし自分なりの真剣さをつくしたこと，④既に発表したものが多いが，丹念に添削したこと，などが述べられている。

〔他の書物について〕

この年には，さらに二つの書物が刊行されている。

C○『男性論』（新居格編，昭和書房，昭和17年11月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1039705

様々な職業の女性たち19人による男性論を収めている。新居格の「編者の言葉」を冒頭に載せる。①一人の読者として諸氏の文章を読んだこと，②編者というのもこの謂であること，③各文章から多くのことを教えられたこと，④内容として極めて真面目なものであること，などが述べられている。

D○『人類生活史』（E.P. プレンティス著，新居格・山内房吉共訳，東洋経済新報社，昭和17年９月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1062545/1/2

冒頭に新居格の「序文」を載せる。①原題は『飢餓の歴史』であること，②内容的には人類生活の発達史とも言えること，③饑饉に処していかに人間が対応してきたかを述べていること，④原著者は該博な知識の持ち主であること，⑤饑饉との関連において歴史を見るという観点は極めて示唆に富むこと（たとえば中国の歴史にも当てはめうる），⑥訳出作業は山内房吉氏の労に大きく負うこと，⑦著者の多識は一般の読書人にも十分の興味をもたらすであろうこと，等々のことがらが述べられている（山内氏の例言も別にある）。

新居格は『街の哲学』の中で，市井人の歴史こそ大切だという論脈において，この本の緒言を引用している。訳者の関心の一端を示唆すると言えよう。

○「市井人の言葉」『街の哲学』（青年書房，昭和16年１月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130299/1/62

この年，次の書物にも一文を寄せている。

○『神宮外苑』（福田勝治著，日本写真工芸社，昭和17年４月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1125126/1/2

この本は，次の三つの部分からなる。

①宇野庄治の文章「神宮外苑」（３コマ）

②新居格の文章「神宮外苑の散歩」（７コマ）

③写真と菊岡久利の詩〔85篇〕（12コマ）

このうちの③が一書の大部分を占める（12～97コマ）。見開き２頁に写真と詩とを対にして載せる（菊岡久利については昭和11年の条参照）。

②の文章では，夏も，秋も，春も，外苑の散歩にはそれぞれに魅力のあることを述べている。さながら「外苑散歩のすゝめ」の趣がある。

〔事跡補遺〕**（与謝野晶子）**

この年，与謝野晶子（1878～1942）が亡くなった（５月29日）。６月末に出た『冬柏』（13巻７号）には，高村光太郎（弔詩「与謝野夫人晶子先生を弔ふ」），堀口大学（「挽歌」）など，多くの人が弔意を表している。新居格も「晶子女史追憶」を書いた（７号はデジタルコレクションには見えない）。

同じく８号にも追悼の文や歌が載り，「消息」欄には，「九日会」（毎年七月九日に開かれていたらしい会合）が追憶の会となったこと，新居格を含む数人が追憶談を語ったこと，などが記されている。

○『冬柏』13巻８号（昭和17年７月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10987258/1/34

９号には「与謝野婦人追憶（九日会席上速記）」として，新居格を含む５氏による談話記録を載せる。

○『冬柏』13巻９号（昭和17年８月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/10987259/1/3

和巻氏〈評伝〉に附載された新居格の文章のうち，最後のもの（p129。《御指名に預かりましたので》で始まる）は「出典不明」とされるが（p131），上の速記記事がそれにあたる。

鉄幹の時に倣って（昭和10年参照），遺稿歌集が出された。高村光太郎・有島生馬両氏の序文を載せる。百日祭を期しての上梓であった（平野万里

「跋」)。

◎『白桜集』(改造社，昭和17年９月)

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1128144

また次の歌文集も刊行された。巻末に年譜を附す。

○『落花抄』(桜井書店，昭和17年12月)

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1128142/1/3

明けて昭和18年にも，次の書物が刊行されている。京都の丸物百貨店で催された「与謝野晶子展」(昭和18年３月２～７日)にまつわる記事等を収める。

○『白桜遺芳』(菅沼宗四郎編，紫紘社，昭和18年９月)

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1127726/1/2

次の歌集もこの年に出された。巻末の附記に「白桜院鳳翔晶耀大姉」の戒名が見える。

◎『与謝野晶子歌集：与謝野晶子自選』(岩波文庫，昭和18年12月)

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1128145/1/4

〔〈小伝〉の記述〕

昭和17年以降も執筆できた雑誌として，次の四つを挙げる(p243)。

①『旅』　②『ホームグラフ』　③『婦人日本』　④『台湾公論』

①の『旅』は，新居格が昭和10年から執筆している雑誌である。昭和17～18年には，次のような記事が見える。

a「交通道徳の新生面」19巻５号(昭和17年)

b「感心した旅館のサービス　旅館よりホテル」19巻５号(同)

c「少国民の旅行」19巻11号(同)

d「戦時旅行の指導講座　旅の時代的解釈」20巻１号(昭和18年)

また③の『婦人日本』には，『新女大学』(昭和18年刊)の元となった文章を書いている(昭和18年の条参照)。

②④については，事実確認をなし得ていない。

〔検索状況について〕

ざっさくプラスでは44件がヒットする(重複２件を除く)。

**昭和１８年(１９４３)〔５６歳〕**

昭和18年について，〈年譜〉では，次の１点を記す。

①執筆を断ち，伊豆長岡宗光寺で暮らす。

〔①について〕

この記事ついては検討の余地がある。下の談話記事の記者の前書きに，《記者は，隣組長として再出馬，八面六臂の活躍を続けてゐられる新居格氏を，雪晴れの日の午後，高円寺のお宅に訪ね》と記されている。これによれば，昭和19年の初めごろには，まだ高円寺に住んでいたことになる。

○「家庭と婦人：総員須らく計画生活者たれ」『東宝産報会報』２・３月合併号〔改題２号〕(東宝産業報国会，昭和19年３月１日発行)

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/7967305/1/15

また，伊豆宗光寺部落の清生寺境内に設けた「老学庵」に住んだのは，《昭和十九年の四月下旬から》と述べている(下記文章)。上の記者前書きと矛盾しない内容と言えよう。伊豆への疎開は「昭和19年の４月下旬から」の可能性を考えておく必要があろうかと思われる。

○「老学庵にて」『人間復興』(玄同社，昭和21年６月)所収

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/2976242/1/57

なお，和巻氏〈評伝〉では，この疎開は《親友天羽英二の配慮》によるものであったとされる(p103)。この点についての事実確認はなし得ていない。

〔書物の刊行について〕

この年，二つの書物が刊行されている。

A○『新女大学』(全国書房，昭和18年１月)

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1039798/1/1

冒頭の「自序」(昭和17年11月)に，《雑誌「婦人日本」に一年有半連載したものに，若干の新稿を書き加へたもの》と記す。デジタルコレクション(館内限定)によると，『婦人日本』の昭和16年12月号に第４回が見え(この年の所蔵はこの号のみ)，17年の５月～12月号にも連載記事を収める(１月～４月号は所蔵なし)。おそらく，こうした記事が元になったのだろう。

内容面については，①平凡な人間の考えに過ぎな

いこと，②卑近な事柄について観察したことや感じたことを書いたこと，③好意と親しみをもって書いたこと，などが述べられている。

B◎『心の日曜日』（大京堂書店，昭和18年10月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130294

冒頭の「自序」では，①平凡な人間なりに反省がしてみたかったこと，②書名も，反省は心の余裕とも言えるという意味で名付けたこと，③声高な情熱よりも冷静なそれを好むこと，④扱う素材は小さいが，自分なりに真摯な思索を行なったこと，⑤大部分が書き下ろしであること，などが述べられている。

標題について小松氏〈小伝〉は，《せめて心にだけでも日曜日を持とうという半ば時代に抵抗する心地よいタイトル・姿勢》と評している（p240）。

次のａ・ｂでは，彼がどのような所に住んだかの遷り変わりを述べ，ｃでは，七高（鹿児島）から法科大学時代にかけての恩師について述べている。伝記面での資料として大切であろう。

a○「居住の歴史」（79コマ）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130294/1/79

b○「高円寺にて」（85コマ）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130294/1/85

c○「師の思ひ出」（108コマ）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130294/1/108

〔事跡補遺〕

この年の九月に，文化学院は強制閉鎖に追い込まれた（下記文献の「文化学院略年表」による：332コマ。再開されたのは昭和21年４月：同）。

○『愛と叛逆 ― 文化学院の五十年 ―』（文化学院出版部／森重出版，1971年５月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/12109744/1/332

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは16件がヒットする（重複２件，書物１件を除いた）。

## 昭和１９年（１９４４）〔５７歳〕

昭和19年について，〈年譜〉では次の１点を記す。

①長男俊一，ビルマで戦死

〔①について〕

①について，日付等の確認はできていない。ただ，新居自身による次のような言葉は残されている。

○《長男はビルマの山の中の形ばかりの野戦病院で病死した。傍にいないので，どんな風に死んでいったか，死の直前，まだ，意識のはっきりしていたとき，どんなことを思っていたのか知る由もない。》「死について」『新居格杉並区長日記：遺稿』（波書房，1975年，「第五部：未発表随筆抄」に収める。記されたのは昭和26年３月28日）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/138

〔その後の事跡〕

前条にも記したとおり，この年の４月に，伊豆・清生寺の老学庵に移り住む。翌年，『農民』（レイモント）の一部再刊を経て終戦を迎え，その年の九月に，高円寺に帰ることになる（前稿）。

老学庵での暮らしぶりについては，そこで想い浮かんだ考えをも含めて，下記の書物に詳しく述べられている（「静観」の62コマ以下，末尾まで）。《二十世紀の方丈記を執筆しよう》という言葉も見える（65コマ）。戦後になってからもそこで過ごすことがあったようである（「椿が泛べた幻想」27コマ）。

◎『心の暦日』（川崎文庫・３。川崎出版社，昭和22年12月）

: https : //dl.ndl.go.jp/pid/1130289/1/62

〔〈小伝〉の記述〕

小松氏〈小伝〉では，戦争末期の新居格について，次の二面を見ている（p241）。

A：可能な限り戦争協力を避けようとした側面

B：戦争体制に少しずつ捲き込まれる側面

一箇の市井人たろうとした人が，どのような事情によって戦争体制から距離を取ることができ，どのような契機によってそこに捲き込まれてしまうのか。「街の生活者」というとらえ方（下記文献参照）をより精密にするためにも，こうしたことの検討は必要であろう。

・小松隆二「街の生活者　新居格」（生活研究同人会編）『近代日本の生活研究 ― 庶民生活を刻みとめた人々―』（光生館　1982年）所収

〔検索状況〕

ざっさくプラスでは３件がヒットする（重複１件

を除いた)。

## むすび

以上，昭和10年代を中心に，新居格の年譜的事項について検討を進めてきた。はじめにも述べたように，新居格はあまりにも広範囲な活動をしているため，年譜的な事跡の確定自体が容易ではなく，このことが，彼について研究の進まない一つの要因になっていると思われる。前稿同様はなはだ不十分なものに終わったが，ここでの試みが，そうした困難を乗り越えるために，ほんの少しでも役立つものとなり得ているならば幸いである。

〔校正時補記〕

成稿後，次の二つの書物の刊行されていることを知った。

①小松隆二『新居格の生涯 —— 自治を最高の基礎として』(論創社，2023年６月)

②新居格（著)・荻原魚雷（編)『新居格随筆集 散歩者の言葉』(虹霓社，2023年12月)

不勉強のため新たな業績を生かし得なかったことは甚だ遺憾であるが，本稿なりの存在意義が全く失われたわけでもないだろうと考え，姑くこのまま印刷に附することにした。大方のご海容を冀う次第である。

（田中敏生　四国大学名誉教授）